

文成公主、金城公主からみる唐・チベット関係

黒田舞子

The Relationship between Tang and Tibet from the viewpoint of princess Wen Cheng and Jincheng princess

KURODA Maiko

In the relationship between Tang and Tibet, you can see that the principal offender was the basis of important diplomatic relations. About the Tang and Tibet in the 7th century - the first half of the 8th century, the whole history of Tibet has been revealed by many previous studies.

Therefore, in this paper, in the history of Tibet, which mainly includes Chinese historical documents such as “Old Tang Book” and “New Tang Book”, the relationship between Tang and Tibet in the history of Tibet, ~ The relationship between Tang and Tibet in the first half of the 8th century, the historical background of the lord's principal, will clarify the meaning that the principal owner of bride's wife married to Tibet and the impact on current.

Keyword: Tang Tibet princess Wen Cheng princess Jincheng princess

一 はじめに

6世紀末のチベットにおいてソンツェンガムポ（Songtsen Gampo：629-650/649）が王となり、チベットにおいて最初の政治的統一が行われた。ソンツェンガムポは、国内をまとめると次に国外へと目を向け始めた。『旧唐書』巻196吐蕃伝には、貞観8年（634）にツェンポ・ソンツェンガムポが、はじめて唐に使節を遣わし朝貢し、唐の太宗に公主との婚姻を求めるが拒否された。これに怒ったソンツェンガムポは、当時チベットの西に隣接していた羊同とともに兵を出し吐谷渾を撃ち、唐の領域の松州へ攻め入った。唐はこれによりチベットとの婚姻を許したとある。貞観14年（640）¹⁾に文成公主がグンソンツェンに嫁いでいる。チベットは婚姻を契機に中国文化や学問を受容し文化面でも発展し、政治外交

1) 山口瑞鳳『吐蕃王国成立史研究』岩波書店、1983年2月、370～380頁。

『旧唐書』『資治通鑑』において嫁いだ年は翌年の貞観15年としているが、山口氏はこの年を江夏王道宗が唐へと帰り、婚姻について報告した年月だとしている。

的には、貞観22年（648）に西域において中天竺に襲われた唐の使者のために援兵を出動した。

唐とチベットとの関係に、降嫁公主が重要な外交関係の基軸となっていたことがわかる。この7世紀～8世紀前半の唐とチベットについて、これまで先学により、チベット史全体が明らかにされてきた。佐藤長氏は王名、年代の不一致を最大の問題とし史実を明らかにした²⁾。佐藤氏は、ソンツェンガムポの生没の正確な年次、ガルトンツェンユルスの長男ガルツェンニヤの没年次、金城公主の婚姻などを明らかにした。山口瑞鳳氏は、古代チベット王国がどのように成立していったかを敦煌文書や漢文史料をなだもとに考証している。山口氏の『チベット』³⁾は『吐蕃王国成立史研究』⁴⁾を簡潔にまとめたものである。これまでは伝説などが混淆していたチベット王家の系譜や起源、ソンツェンガムポの祖父以来の歴史を明らかにした。また文成公主はソンツェンガムポに嫁いだとされてきたがそれが誤りであると詳細に講究した。

藤野月子氏は中国古代における国際結婚をテーマに『王昭君から文成公主へ』⁵⁾において文成公主と金城公主の婚姻は漢の時代と同様に“恩寵”の性格をもっていたものとした。藤野氏は公主全体からその一つとして二人の公主に着目している。菅沼愛語氏は『7世紀後半から8世紀の東部ユーラシアの国際情勢とその推移』⁶⁾により、唐とチベットがどのような戦いを行いどのような関係であったかを詳述し、その中で両国間の同盟についても言及した。菅沼氏は7世紀後半から8世紀についての唐を取り巻くチベットと周辺諸国との関係について明らかにした。

このように先学の研究は、佐藤氏、山口氏はチベット史全体を、藤野氏は公主の中の文成、金城公主について、菅沼氏は双方の歴史を他国との関係やその背景も含め明らかにした。上記の研究はチベット史全体もしくは公主から唐とチベットの関係を明らかにされた。

そこで本論文では、『旧唐書』や『新唐書』など中国史料を中心に、佐藤氏や山口氏が指摘した歴史事実に関する年代の相違なども多いチベット史において、唐とチベットの関係について降嫁公主の視点から、7世紀～8世紀前半の唐とチベットとの関係、降嫁公主の歴史的背景から、降嫁公主等がチベットに嫁いだ意味や現在に至る影響などについて明らかにするものである。

二 唐とチベットとの関係史

唐は建国時、北方の東西突厥に対して力をいれていた。突厥平定後は東方の朝鮮半島や高句麗の支配を重視していた⁷⁾。チベットは新興国であったことから唐はチベットに対し、融和政策で臨んでいた⁸⁾。東

2) 佐藤長『古代チベット史研究』上巻、東洋史研究、1958年9月。

3) 山口瑞鳳『チベット』下巻 改訂版、東京大学出版会、2004年6月 第三章歴史参照。

4) 山口瑞鳳『吐蕃王国成立研究史』。

5) 藤野月子『王昭君から文成公主へ—中国古代の国際結婚』九州大学出版会、2012年3月。

6) 菅沼愛語『7世紀後半から8世紀前半の東部ユーラシアの国際情勢とその推移—唐・吐蕃・突厥の外交関係を中心に—』溪水社、2013年12月。

7) 菅沼愛語『7世紀後半から8世紀前半の東部ユーラシアの国際情勢とその推移—唐・吐蕃・突厥の外交関係を中心に—』6頁。

8) 菅沼愛語『7世紀後半から8世紀前半の東部ユーラシアの国際情勢とその推移—唐・吐蕃・突厥の外交関係を中心に—』6頁。

突厥は、貞観4年（630）に太宗により滅ぼされ、その残った勢力は唐の支配下に置かれている。西突厥は顕慶2年（657）に滅ぼされ、その後東西に分かれ傀儡政権が置かれた。太宗が亡くなった後の総章元年（668）に東方の高句麗は唐と新羅の連合したことにより滅ぼされた。この間にチベットが西域と青海に侵攻したのである。これ以前に太宗は安西都護府を設置し青海の吐谷渾を支配下に置くなどして、唐は西域に対し力をいれていくのである。

しかし、唐は総章元年（668）以降、高宗の崩御や則天武後の支配など内部でもたびたび皇帝が変わるなど混乱があった。さらにチベットだけでなく西突厥や東突厥が唐に攻め入るなど大変難しい状況にあった。

チベットは、6世紀末にソンツェンガムポが王になり政治的統一が行われ、国内をまとめあげると次に国外へと目を向けた。『旧唐書』巻196吐蕃伝に貞観8年（634）に、

貞観八年、其贊普棄宗弄讚始遣使朝貢。⁹⁾

とあるように、ツェンポ、ソンツェンガムポは、はじめて使者を唐朝に遣わし朝貢した。

その後、彼は太宗に公主との婚姻を求めるが拒否され、これに怒ったソンツェンは羊同とともに兵を出し吐谷渾を撃ち、四川の松州へ侵攻した。唐はこの事件によって婚姻を許し、文成公主が貞観14年（640）にチベットへと嫁いだ。この後は唐側にあまり記録がないことから双方争うこともなく、次にチベットについて記されているのは以下のことである。

貞観22年（648）には西域で襲われた唐の使者のために兵を出し救助している。そのことは、『旧唐書』巻196吐蕃伝に、

〔貞観〕二十二年、右衛率府長史王玄策 使往西域、為中天竺所掠、吐蕃發精兵與玄策擊天竺、大破之、遣使來獻捷。¹⁰⁾

とある。貞観22年に太宗は王玄策を西域に使わしたところ、途中で中天竺に襲われた。そこでチベットは軍を派遣して王玄策とともに天竺を大破した。このようにその当時のチベットは唐朝に協力的であった。

貞観23年（649）にソンツェンガムポが亡くなると孫のマンソンマンツェンが王となった。しかし、彼は幼かったため、国の政治は祿東贊（ガルトンツェンユルス）が行うこととなる¹¹⁾。またガルトンツェンは貞観15年（641）に太宗から右衛大將軍に命じられ、琅邪長公主外孫女段氏を妻に与えられた（ガルトンツェンはこれを拒否した）ことが書かれている¹²⁾ ことから太宗に認められるほどの手腕があったことが分かる。

そして顕慶3年（658）にチベットは唐へと公主を願い出ている。この事は次に見る『新唐書』以外に『冊府元龜』巻979 外臣部 和親第二には次のようにある。

に一』27頁。

9) 『舊唐書』第16冊、中華書局、1975年5月、5221頁。

10) 『舊唐書』第16冊、5222頁。

11) 『舊唐書』第16冊、5222頁。

12) 『資治通鑑』第7冊、中華書局、1976年9月、6164頁。

山口瑞鳳『吐蕃王国成立史研究』374～375頁。

顯慶三年冬十月庚申、吐蕃贊普遣使來請婚、仍獻金毳罽及犛牛尾。¹³⁾

婚姻が拒否され、それに加え吐谷渾が唐側へつuitたため唐を攻撃している。このことは『新唐書』卷216吐蕃伝¹⁴⁾にも見られる。そして吐蕃と吐谷渾の争いは『旧唐書』卷196にも見られる¹⁵⁾。この出来事によりチベットが吐谷渾を大敗させ、その王諾曷鉢と妃弘化公主を敗走させるに至ったのである。

龍朔2年(662)に中央アジアにチベットの軍隊が出陣し、同年には女国、勃律を服属または懐柔している¹⁶⁾。麟徳元年(665)には、吐蕃は疏勒・弓月と共に于闐に侵入した。

咸亨元年(670)までに、于闐は吐蕃の勢力下に入り、同年には于闐の衆を率いて龜茲やその他の安西四鎮を襲撃した。それは『旧唐書』、『新唐書』、卷216吐蕃伝¹⁷⁾『資治通鑑』卷201、咸亨元年¹⁸⁾にも見られる。

『旧唐書』卷5高宗本紀には、次のようにある。

夏四月、吐蕃寇陷白州等一十八州、又與于闐合衆襲龜茲撥換城、陷之。罷安西四鎮。¹⁹⁾

このように于闐も引き連れ、戦ったことは前述した。これには吐谷渾も関係しており、この戦いで吐谷渾の領土を制圧し、吐谷渾を滅ぼすに至った。『旧唐書』卷196に、

咸亨元年四月…(中略)…軍至大非川、為吐蕃大將論欽陵所敗…(中略)…吐谷渾全國盡沒、唯慕容諾曷鉢及其親信數千帳來内屬、仍徙於靈州。自是吐蕃連歲寇邊、當、悉等州諸羌盡降之。²⁰⁾

とあり、チベットが唐の軍を吐谷渾の本拠に近い²¹⁾大井川で破った。そして慕容諾曷鉢とその親しい臣下が唐へ来て内属してきたため、靈州へと移動させたことから吐谷渾の地が、チベットの地になったことが分かる。

さらに670年の戦いで安西四鎮の奪還に成功した。『新唐書』に次のように見られる。

咸亨元年、入殘羈縻十八州、率于闐取龜茲撥換城、於是安西四鎮並廢。²²⁾

上述した「自是吐蕃連歲寇邊」とあるように、これ以後毎年のように唐に攻め入るようになる。また安西四鎮の一つである于闐を率いたことは森安孝夫氏が言うように670年が唐と吐蕃の西域争奪史上きわめて重要であることは明白である²³⁾。これ以降、唐とチベットが何度も戦うようになることからこの戦いが転機であることは間違いない。森安氏によれば、咸亨4年(673)には疏勒が、上元元年(674)には于闐が唐に降し、儀鳳元年(676)までには焉耆及び龜茲を含めて安西四鎮は唐側へ靡いている²⁴⁾。

13) 『冊府元龜』第11冊、11330頁。

14) 『新唐書』第19冊、6075頁。

15) 『舊唐書』第16冊、5223頁。

16) 森安孝夫「吐蕃の中央アジア進出」『金沢大学文学部論集・史学科篇』第4号、7～8頁。

17) 『新唐書』第19冊、中華書局、1975年2月、6363頁。

18) 『資治通鑑』第7冊、6164頁。

19) 『舊唐書』第1冊、94頁。

20) 『舊唐書』第16冊、5225頁。

21) 森安孝夫「吐蕃の中央アジア進出」10頁。

22) 『新唐書』第19冊、6076頁。

23) 森安孝夫「吐蕃の中央アジア進出」10頁。

24) 森安孝夫「吐蕃の中央アジア進出」12頁。

儀鳳元年（676）²⁵⁾にマンソンマンツェンが亡くなり、その息子チドゥソンが王となったことは『旧唐書』巻196に、

儀鳳四年、贊普卒。其子器弩悉弄嗣位、復號贊普、時年八歳、國政復委於欽陵。²⁶⁾

とあり、チドゥソンがツェンポとなった。しかし彼は幼かったため、ガル一族の一人である欽陵（チンリン）が政治を担うことになった。しかしチンリンが大論として政治を担うのは兄の贊悉若（ツェンニャ）が亡くなった以降のことである。いずれにせよ、ガルトンツェンユルスからの対外政策を受け継ぐことになり、積極的に西域へと進出するのである。

さらに『旧唐書』に、上元三年（676年）、吐蕃は鄯・廊等の州へ侵攻し、人や官吏を殺害し略奪した。高宗は尚書左僕射の劉仁軌に命じ、洮河軍に行かせ守護しチベットの攻撃を防いだ。そこで関内、河東及び諸州の強い勇者を招集して官位や地位を問わず‘猛士’とした。かつて文武官に任命されたことがある者は召され宮廷に招かれ宴を催され、派遣されチベットと戦ったのである。

この時期のチベットは、チュルク族と協調関係を持ち西域へ進出している。上元2年（675）には吐蕃の宰相ツェンニャがチュルク国へ赴いている。その翌年にはツェンニャが自ら兵を率いてチュルク国へ行っている。これは翌年の龜茲への一斉攻撃に備えてのことであった²⁷⁾。翌年の儀鳳2年（677）に西突厥の阿史那都支と連合し龜茲の安西都護府に侵攻する。これに対し高宗は、儀鳳3年（678）に軍隊を出動し防禦している。この戦いで、唐はチベットに大敗するのである。『旧唐書』吐蕃伝²⁸⁾に見られる。

上元3年（676）の戦いで負けた劉仁軌に代わり、李敬玄を洮河にて守らせた。関内、河東および諸州から義勇兵を募り、かつ文武官に任じられた者を軍に派遣させた。そして益州の長史や嵩州の都督は軍隊を出し、チベットの侵攻を防禦した。秋に、敬玄が兵を率いて青海でチベットと戦ったが敗北している。

菅沼氏によるとこの戦いで唐は新羅に向けていた兵を一極集中して対チベットに兵力を動員させ、18万もの大軍でチベットと戦ったが、大敗した。これは唐の威信を揺るがす事態であり、周辺諸国にも多大な影響を与えたとしている²⁹⁾。

当時のチベットの勢力の大きさは『旧唐書』にも見られる。

時吐蕃盡收羊同、党項及諸羌之地、東與涼、松、茂、嵩等州相接、南至娑羅門、西又攻陷龜茲、疏勒等四鎮、北抵突厥、地方萬餘里、自漢、魏已來、西戎之盛、未之有也。³⁰⁾

チベットは羊同・党項及び諸羌の地を全て収め、東は涼・松・嵩等の州と隣接し、南はインドに至り、

25) 下記の通り『旧唐書』には儀鳳四年である。だが、佐藤長氏によればこの年は宋令文がマンソンマンツェンの死に哀悼の意を表すためにチベットへと出発した年である。『《冊府元龜》吐蕃史料校證』四川民族出版社、1981年12月、56頁の注釈にも儀鳳元年であり、四年にそのことが伝わったのが儀鳳4年のことである表示がある。

26) 『舊唐書』第16冊、5224頁。

27) 森安孝夫「吐蕃の中央アジア進出」13～14頁。

28) 『舊唐書』第16冊、5223～5224頁。

29) 菅沼愛語『7世紀後半から8世紀前半の東部ユーラシアの国際情勢とその推移—唐・吐蕃・突厥の外交関係を中心に—』40～41頁。

30) 『舊唐書』第16冊、5224頁。

西はまた龜茲・疏勒等の四鎮を陥落し、北は万余里の土地と突厥を抑えた。このように漢や魏の時代の西方民族の勢いには至らないものの唐の記録に載せるべきとの勢いであったのである。

開耀元年(680)に文成公主が亡くなり高宗はチベットに使いを送り弔っている。

垂拱元年(685)に宰相のガルの長男であるツェンニャが亡くなりその弟チンリンが宰相となった³¹⁾。

垂拱3年(687)に唐の支配下にあった四鎮を再び奪いとり焉耆、龜茲を陥落し、四鎮を奪い取った³²⁾。

その翌々年の永昌元年(689)唐は軍隊をチベットに向け派遣し、唐はチベットに大敗した。軍の派遣が遅れたのは則天武后が越王の乱を鎮圧していたためである。689年の戦いは『資治通鑑』巻204、永昌元年に記述がある。

五月、丙辰、命文昌右相韋待價為安息道行軍大總管、擊吐蕃。…(中略)…

韋待價軍至寅識迦河、與吐蕃戰、大敗。待價既無將領之才、狼狽失據、士卒凍餒、死亡甚衆、乃引軍還。太后大怒、丙子、待價除名、流繡州、斬副大總管安西大都護閻溫古。安西副都護唐休璟收其餘衆、撫安西土、太后以休璟為西州都督。³³⁾

如意元年／長壽元年(692年)において大首領、曷蘇の降伏や、同じく大首領の咎捶が羌蛮8,000人余りを連れての亡命が起った。『旧唐書』吐蕃伝、如意元年(692)³⁴⁾、『資治通鑑』巻205長壽元年(692)³⁵⁾より、チベット内の情勢はあまり安定していなかったことが伺える。同年には唐がチベット軍を破り四鎮を回復している。『旧唐書』吐蕃伝に、

長壽元年、武威軍總管王孝傑大破吐蕃之衆、克復龜茲、于闐、疏勒、碎葉等四鎮、乃於龜茲置安西都護府、發兵以鎮守之。³⁶⁾

とあり、唐は龜茲、于闐、疏勒、碎葉などの四鎮をチベットから奪還すると、その地に安西都護府を置いた。これに対しチベットは四鎮を奪還すべく、西突厥の阿史那倭子と連合をし、唐へと攻撃した。しかしチベット軍は唐に破れることとなったのである³⁷⁾。

證聖元年／天冊万歳元年(695)チベットの宰相チンリンは軍を率いて攻撃を行い、臨洮に侵攻した。

31) 佐藤長『古代チベット史研究』上巻、342～344頁。

森安孝夫「吐蕃の中央アジア進出」16～17頁。

菅沼愛語『7世紀後半から8世紀前半の東部ユーラシアの国際情勢とその推移—唐・吐蕃・突厥の外交関係を中心に—』45頁。

32) 佐藤長『古代チベット史研究』上巻、346～352頁。

森安孝夫「吐蕃の中央アジア進出」16～17頁。

菅沼愛語『7世紀後半から8世紀前半の東部ユーラシアの国際情勢とその推移—唐・吐蕃・突厥の外交関係を中心に—』45頁。

33) 『資治通鑑』第7冊、6457～6459頁。

34) 『舊唐書』第16冊、5225頁。

35) 『資治通鑑』第7冊、6482頁。

36) 『舊唐書』第16冊、5225頁。

37) 菅沼愛語『7世紀後半から8世紀前半の東部ユーラシアの国際情勢とその推移—唐・吐蕃・突厥の外交関係を中心に—』47頁。

そのころチベット本国では前年の戦いで指揮官であったグントン（チンリンの末弟）³⁸⁾は敗戦の責任を問われ王のチドゥソンの命により処刑されることとなった。この時チドゥソンは27歳になり、宰相が国政を擅にしている状態に不満を持ち、親政を望んでいた³⁹⁾。そして続く万歳登封元年／万歳通天元年（696）にチンリンは素羅汗山にて唐に大勝するのである。この経緯は『旧唐書』、『資治通鑑』巻205、萬歲通天元年（696）⁴⁰⁾、『冊府元龜』巻443巻将帥部⁴¹⁾に見られる。

『旧唐書』吐蕃伝には、

歳登封元年、孝傑復為肅邊道大總管、率副總管婁師德與吐蕃將論欽陵、贊婆戰于素羅汗山、官軍敗績、孝傑坐免官。萬歲通天元年、吐蕃四萬衆奄至涼州城下、都督許欽明初不之覺、輕出按部、遂遇賊、拒戰久之、力屈為賊所殺。時吐蕃又遣使請和、則天將許之、論欽陵乃請去安西四鎮兵、仍索分十姓之地、則天竟不許之。⁴²⁾

とある。唐が大敗した後、王孝傑は敗戦の責任を問われ免官された。チンリンは則天武后に和平を請い、彼女はこれを許そうとした。だが、安西四鎮の兵を引き揚げることや西突厥の十姓の地を分割することは許されなかった。これにはチベットの内部事情に通じていた郭分振によりチンリンの望みを退けることができた⁴³⁾。

聖暦元年（698年）チドゥソンは大人に大臣と共にチンリン等のガル一族を失脚させることに成功する。『旧唐書』吐蕃伝に次のようにある。

聖暦二年⁴⁴⁾、其贊普器弩悉弄年漸長、乃與其大臣論巖等密圖之。時欽陵在外、贊普乃佯言將獵、召兵執欽陵親黨二千餘人、殺之。發使召欽陵、贊婆等、欽陵舉兵不受召、贊普自帥衆討之、欽陵未戰而潰、遂自殺、其親信左右同日自殺者百餘人。⁴⁵⁾

同様の内容は『資治通鑑』巻206聖暦2年にも見られる。

器弩悉弄浸長、陰與大臣論巖謀誅之。會欽陵出外、贊普詐云出畋、集兵執欽陵親黨二千餘人、殺之、遣使召欽陵兄弟、欽陵等舉兵不受命。贊普將兵討之、欽陵兵潰、自殺⁴⁶⁾

とある。ここには、チドゥソンは歳を重ね、一人で執政できる年齢⁴⁷⁾になった。そこで大臣の論巖達とチンリンの失脚を図った。その時チンリンは外におり、ツェンボはそこで獵をしようと嘘を吐いた。兵を召してチンリンの親しい者たちの二千余りの人を捕えた。ツェンボは自分の兵を率いてチンリンを討

38) 佐藤長訳注「吐蕃伝（旧唐書・新唐書）」『騎馬民族史3—正史北狄伝』平凡社（東洋文庫）、1973年3月114～115頁。

39) 菅沼愛語『7世紀後半から8世紀前半の東部ユーラシアの国際情勢とその推移—唐・吐蕃・突厥の外交関係を中心に—』48頁。

40) 『資治通鑑』第7冊、6504頁。

41) 『冊府元龜』第5冊、将帥部、4993頁。

42) 『舊唐書』第16冊、5225頁。

43) 森安孝夫「吐蕃の中央アジア進出」21頁。

44) 佐藤長『古代チベット史研究』上巻、東洋史研究、1958年9月 365頁によれば二年は元年の誤りである。二年はツェンボが唐へ亡命した時のことであり、この事は『資治通鑑』に記述がある。

45) 『舊唐書』第16冊、5225～5226頁。

46) 『資治通鑑』第7冊、6539～6540頁。

47) チドゥソンが王になった時はとても幼くガル家が政治を代わりに執り行っていた。

ち、欽陵はまだ戦うことなく敗戦し、遂に自殺をはかり、その近臣で同日に自殺を謀った者が百人余と言われる。また、チンリンの弟である贊婆（ツェンワ）は千余人を連れて唐へ亡命している。そして則天武后はツェンワに大將軍の位を授け、丁重に扱った。『旧唐書』に次のようにある。

贊婆率所部千餘人及其兄子莽布支等來降、則天遣羽林飛騎郊外迎之、授贊婆輔國大將軍、行右衛大將軍、封歸德郡王、優賜甚厚、仍令領其部兵於洪源谷討擊。尋卒、贈特進、安西大都護。⁴⁸⁾

また、『資治通鑑』巻第206卷聖曆二年には、次の記述がある。

吐蕃贊普器弩悉弄尚幼、論欽陵兄弟用事、皆有勇略、諸胡畏之。欽陵居中秉政、諸弟握兵分據方面、贊婆常居東邊、為中國患者三十餘年。器弩悉弄浸長陰與大臣論巖謀誅之。會欽陵出外、贊普詐云出畋、集兵執欽陵親黨二千餘人、殺之、遣使召欽陵兄弟、欽陵等舉兵不受命。贊普將兵討之、欽陵兵潰、自殺。夏四月、贊婆帥所部千餘人來降、太后命左武衛鎧曹參軍郭元振與河源軍大使夫蒙令卿將騎迎之、以贊婆為特進、歸德王。欽陵子弓仁、以所統吐谷渾七千帳來降、拜左玉鈴衛將軍、酒泉郡公⁴⁹⁾。

ガル一族は失脚し、滅亡した。彼らの一族がガルトンチェンユルスのおかげから取ってきた対外政策は終わりを迎えたのである。これ以降チドゥソンは、西域より河西、青海、四川地域の唐との国境地帯に対して力を注いでいく。そのためガル一族の滅亡により対外進出が無くなったわけではない⁵⁰⁾。

『旧唐書』、『新唐書』、『資治通鑑』によれば久視元年（700）に麴莽布支（クウマンボジェスラン）⁵¹⁾を遣わし昌松県へ侵攻するも唐軍に返り討ちにあっている。長安2年（702）チドゥソンは兵を率いて悉州へ侵攻するも敗北し、唐に使者を送り和平を願い出ている。長安3年（703）チベットは再び唐へと使者を送り、贈り物を献上すると共に婚姻を求め、則天武后は許可をした。

長安4年（704）チドゥソンは南境（南詔方面）に起こった反乱の討伐の途中で死亡した。しかしこの時期、チベットでは前王の弟が反乱を起こし、周辺諸国が反旗を翻すなど国内外で混乱があり、チドゥソンの息子がツェンボに直ぐ即位しなかった。亡くなった年やチデツクツェンの即位について誤っている⁵²⁾が、このことについて『旧唐書』吐蕃伝には、「時吐蕃南境屬國泥婆羅門等皆叛、贊普自往討之、卒於軍中。諸子爭立、久之、國人立器弩悉弄之子棄隸踏贊為贊普、時年七歲。中宗神龍元年、吐蕃使來告喪、中宗為之舉哀、廢朝一日」⁵³⁾とあり、『新唐書』吐蕃伝には、「遣左肅政臺御史大夫魏元忠為隴右諸軍大總管、率隴右諸軍大使唐休璟出討。方虜攻涼州、休璟擊之、斬首二千級。於是論彌薩來朝請和。贊普自將萬騎攻悉州、都督陳大慈四戰皆克。明年、乃獻馬、黃金求昏。而虜南屬帳皆叛、贊普自討、死于軍。諸子爭立、國人立棄隸踏贊為贊普、始七歲、使者來告喪、且求盟。又使大臣悉董熱固求昏、未報」⁵⁴⁾と見

48) 『舊唐書』第16冊、5226頁。

49) 『資治通鑑』第7冊、6569頁。

50) 森安孝夫「吐蕃の中央アジア進出」21～22頁。

51) 佐藤長訳注「吐蕃伝（旧唐書・新唐書）」『騎馬民族史3—正史北狄伝』、120～121頁によれば正しくは麴莽布支であり、そのためクウマンボジェスランになる。『旧唐書』の読みだとスマンボジェとなる。

52) 佐藤長『古代チベット史研究』上巻、392～411頁によればチドゥソンは704年に亡くなった。そして、チデツクツェンは704年に生まれたのであり、7歳も誤りである。更に彼が即位したのは712年である。

53) 『舊唐書』第16冊、5226頁。

54) 『新唐書』第19冊、6080頁。

られ、『資治通鑑』第207巻、長安3年にも、「吐蕃南境諸部皆叛、贊普器弩悉弄自將擊之、卒於軍中。諸子爭立、久之、國人立其子棄隸踏贊為贊普、生七年矣」⁵⁵⁾ などとある。

神龍元年（705）チデツクツェンの祖母可敦（マルンソンマンツェンの妃チェマロ）⁵⁶⁾ が大臣を唐に送り婚姻を願った。菅沼氏によれば705年に唐・チベット間に会盟が結ばれ、翌年の景龍元年（706）それが許可されたため、金城公主が嫁ぐこととなったとある⁵⁷⁾。709年大臣尚贊吐（シャンツェントレジン）⁵⁸⁾ らは金城公主を迎えに行くため派遣された。そして翌年の景龍4年（710）に金城公主はチベットへと到着した。この時チデツクツェンは7歳である⁵⁹⁾。金城公主との婚姻によって和平が締結されたようにみえた。だが710年頃には安西都護府の張玄表と交戦を繰り返している⁶⁰⁾。『旧唐書』吐蕃伝には「睿宗即位、…（中略）…時張玄表為安西都護、又與吐蕃比境、互相攻掠、吐蕃內雖怨怒、外敦和好」⁶¹⁾ とあり、『資治通鑑』巻210景雲元年には、「安西都護張玄表侵掠吐蕃北境、吐蕃雖怨而未絶和親、乃賂鄯州都督楊矩、請河西九曲之地以為公主湯沐邑、矩奏與之」⁶²⁾ とある。

先天元年（712）⁶³⁾ にチベットは鄯州の都督に賄賂を送り、金城公主の化粧料として河西九曲を割譲された。河西九曲は肥沃で畜牧に適しており、チベットはここを基地とした。そして、開元2年（714）チベットの大將盆達焉（ボンダギエル）と乞力徐（チウス）らは十余万の兵を率いて甘肅省臨潭県に侵入した。さらに進軍し蘭州、渭州まで攻め入る。唐は先鋒の王海濱を失うもチベット兵数万人を殺害し羊馬を奪い返した。チベットは大臣の宋我因子を遣わし、和平を請うも玄宗は許さなかった。このことは『旧唐書』、『新唐書』の吐蕃伝に見られる。『旧唐書』吐蕃伝には、次のようにある。

開元二年秋、吐蕃大將盆達焉、乞力徐等率衆十餘萬寇臨洮軍、又進寇蘭、渭等州、掠監牧羊馬而去。楊矩悔懼、飲藥而死。玄宗令攝左羽林將軍薛訥及太僕少卿王晙率兵邀擊之。仍下詔將大舉親征、召募將士、克期進發。俄而晙等與賊相遇於渭源之武階驛、前軍王海賓力戰死之、晙等率兵而進、大破吐蕃之衆、殺數萬人、盡收得所掠羊馬。賊餘黨奔北、相枕藉而死、洮水為之不流。上遂罷親征、命紫微舍人倪若水往按軍實、仍弔祭王海賓而還。吐蕃遣其大臣宗俄因子至洮河祭其死亡之士、仍款塞

55) 『資治通鑑』第7冊、6569頁。

56) 佐藤長訳注「吐蕃伝（旧唐書・新唐書）」『騎馬民族史3—正史北狄伝』、123～124頁。

57) 菅沼愛語『7世紀後半から8世紀前半の東部ユーラシアの国際情勢とその推移—唐・吐蕃・突厥の外交関係を中心に—』120～130頁。

58) 佐藤長『古代チベット史研究』上巻、393頁。

佐藤長訳注「吐蕃伝（旧唐書・新唐書）」『騎馬民族史3—正史北狄伝』、122頁。

59) 佐藤長『古代チベット史研究』上巻、394～412頁。

60) 森安孝夫「吐蕃の中央アジア進出」26頁。

菅沼愛語『7世紀後半から8世紀前半の東部ユーラシアの国際情勢とその推移—唐・吐蕃・突厥の外交関係を中心に—』70頁。

61) 『舊唐書』第16冊、5228頁。

62) 『資治通鑑』第7冊、6661頁。

63) 佐藤長『古代チベット史研究』上巻、417～419頁。

菅沼愛語『7世紀後半から8世紀前半の東部ユーラシアの国際情勢とその推移—唐・吐蕃・突厥の外交関係を中心に—』70頁。

請和、上不許之。自是連年犯邊、郭知運、王君〔々口比大〕大相次為河西節度使以捍之。⁶⁴⁾

714年以降毎年辺境に侵入し、河西節度使がこれを防御することを繰り返したのである。その後の詳細については『新唐書』吐蕃伝⁶⁵⁾にあり、年代は『冊府元龜』⁶⁶⁾を見られる。

開元4年(716)チベットは和睦を願い出て、玄宗は贈物を送った。そして翌年には金城公主とチベットクツェンは玄宗に再び和睦を願い出たが、許されなかった。開元4年から開元6年(718)にかけてチベットは唐へと侵攻することもなくなった。開元7年(719)再びチベットは玄宗に和睦を願い出た。玄宗はそれに対し、既に和親し盟約が結ばれているため、再び盟約を結びなおす必要がないとして、再度の盟約を許可しなかった。玄宗はツェンポやツェンポの祖母(チェマロ)などに贈物を贈った。それよりチベットは毎年朝貢し、国境を侵すことはなくなったのである。

森安氏によれば、開元2年(715)以降もチベットは西域進出の機会を伺っており、開元10年(722)チベットは小勃律酷を攻撃するに至った。西域進出に必要な途上にある小勃律は親唐的であり、この道を使えなくなるということを防ぐ必要があったためである。しかし、この戦いにチベットは敗れることとなり西域進出の道は断たれた⁶⁷⁾。『旧唐書』によれば開元15年(727)に、唐はチベットを青海の西において破っている。『旧唐書』吐蕃伝に、

〔開元〕十五年正月、君臬大率兵破吐蕃于青海之西、虜其輜重及羊馬而還。⁶⁸⁾

とあり、続いて、

君臬大畏其鋒、不敢出戰。會大雪、賊凍死者甚衆、遂取積石軍西路而還。君臬先令人潛入賊境、於其歸路燒草。悉諾邏軍還至大非川、將士息甲牧馬、而野草皆盡、馬死過半。君臬大與秦州都督張景順等率衆襲其後、入至青海之西、時海水冰合、將士並乘冰而渡。會悉諾邏已渡大非川、輜重及疲兵尚在青海之測、君臬大縱兵俘之而還。⁶⁹⁾

とある。これは破る以前にチベットが大斗谷に侵攻してきたためである。さらに続いて、

其年九月、吐蕃大將悉諾邏恭祿及燭龍莽布支攻陷瓜州城、執刺史田元獻及王君臬大之父壽、盡取城中軍資及倉糧、仍毀其城而去。又進攻玉門軍及常樂縣、縣令賈師順嬰城固守、凡八十日、賊遂引退。俄而王君臬大為迴紇餘黨所殺、乃命兵部尚書蕭嵩為河西節度使、以建康軍使、左金吾將軍張守珪為瓜州刺史、修築州城、招輯百姓、令其復業。時悉諾邏恭祿威名甚振、蕭嵩乃縱反間於吐蕃、云其與中國潛通、贊普遂召而誅之。⁷⁰⁾

とあり、同年の9月、727年チベットは甘粛省の瓜州城に攻め入り城を破壊し、玉門軍と常楽県に侵攻した。しかし唐軍が守り抜いたため80日後に引き上げた。そして閏9月には以前からの同盟国である突騎施だけでなく、突厥やウイグルの一部とも同盟を結んだ。その上で安西都護府に侵攻するが、安西都護

64) 『舊唐書』第16冊、5228頁。

65) 『新唐書』第19冊、6081～6083頁。

66) 蘇晋仁、蕭鍊子校註『『冊府元龜』吐蕃史料校註』四川民族出版社、1981年12月、106～112頁。

67) 森安孝夫「吐蕃の中央アジア進出」33～34頁。

68) 『舊唐書』第16冊、5229頁。

69) 『舊唐書』第16冊、5229頁。

70) 『舊唐書』第16冊、5229頁。

に撃退された⁷¹⁾。この726年～727年にかけてチベットは河西に侵入する⁷²⁾。開元16年（728）チベットは大将悉未朗（ラン）として再び唐が支配した瓜州城に再び侵攻するも唐に敗北した。8月再び唐はチベットと戦い勝利する。

開元17年（729）大同軍を率いて唐軍と戦い敗北し、また石堡城が奪われている。チベットは河西侵攻に度々失敗し、玄宗に和睦を求めた。玄宗は臣下の助言によりこれを許可し、使者をチベットに遣わした。チベットは唐の使者を歓迎し、和平を願い唐へ贈り物を献上した。金城公主はこれとは別に金製のものを贈った。

開元18年（730）チベットの重臣名悉獵（ニエレブ）が唐を訪れた。その後、唐はその返礼として使者を送り、これ以上相互に侵攻しないことを約束した。開元21年（733）金城公主が玄宗に赤嶺を国境とし、この地に碑を建てることを提案し許可され、石碑が建てられた。

開元24年（736）チベットは西方で小勃律を攻撃し、玄宗はこれに大変怒った。736年希逸がチウスとの和平を破り青海のほとりでチベットを討っている。希逸の死後は別のものにチベットを討たせ、石碑を破壊した。開元26年（738）杜希望が軍を率いてチベットの新城に侵攻し新たな城をつくるも、チベットに攻め込まれ敗北する。739年チベットが白水軍などに侵攻するも白水軍は攻防しチベットは退却した。開元28年（740）唐は官軍を率いてチベットの維州の城に侵攻し、チベットの将などを見殺しにする。開元29年（741）金城公主が亡くなったことが告げられた。チベットは和平を請うも玄宗はこれを許さず、彼女のために哀悼の儀を行い三日間だけ執務を止めている。

三 文成公主と金城公主のチベットへの降嫁

文成公主のチベットへの降嫁について『旧唐書』巻196吐蕃伝に、

貞観十五年⁷³⁾、太宗以文成公主妻之、令禮部尚書、江夏郡王道宗主婚、持節送公主於吐蕃。弄讚率其部兵次柏海、親迎於河源。⁷⁴⁾

とあり、貞観14年（640）に禮部尚書江夏郡王道宗に婚礼の儀を取り扱わせ、黄河の源流域まで送り、同地でツェンポ自らが兵士を連れて文成公主ら唐の使節を迎え、文成公主がチベットに嫁いだ。

金城公主の婚姻について『旧唐書』巻196吐蕃伝に、

景龍三年十一月、又遣其大臣尚贊吐等來迎女…（中略）…〔景龍四年〕其月、帝幸始平縣以送公主、設帳殿於百頃泊側、引王公宰相及吐蕃使入宴。⁷⁵⁾

とあり、景龍4年（710）に中宗が自ら西安の西の始平県まで公主を見送りに行った。ちなみに始平県は、金城公主の名に因んで金城県と改名された。この地で中宗は見送りとして王公宰相及びチベットの

71) 菅沼愛語『7世紀後半から8世紀前半の東部ユーラシアの国際情勢とその推移—唐・吐蕃・突厥の外交関係を中心に—』75～78頁。

72) 森安孝夫「吐蕃の中央アジア進出」34～35頁。

73) 実際は貞観14年（640年）であると山口氏は指摘している。

74) 『舊唐書』第16冊、5221頁。

75) 『舊唐書』第16冊、5226～5227頁。

使者と宴を開いた。その後、金城公主はチベットへと嫁いだ。

文成公主、金城公主がチベットへと嫁いだことは吐蕃と唐の関係において無視することは出来ない。『旧唐書』の吐蕃伝『資治通鑑』、『冊府元龜』においてもそのことが具体的記され、整理すると次の表1のようになる。

表1 唐・チベット関係に関わる公主⁷⁶⁾

中国暦	事 項	出 典
貞観8年 634年 ～ 貞観14年 640年	ソンツェンは突厥や吐谷渾が皆公主を娶ったことを聞き、唐へ金や宝を多く送り、公主の降嫁を願った。太宗は始めそれを許したが、吐谷渾の王が唐へやって来てチベットが公主を貰えないよう画策したことにより、太宗は公主を娶らすことを許さなかった。ソンツェンはこれを聞き怒り、吐谷渾へと兵を出し、その後松州へと侵入した。	『舊唐書』吐蕃伝、5221頁。 『資治通鑑』巻195、6139頁。
貞観14年 640年 ～ 貞観15年 641年	唐の宰相ガルトンツェンユルスが唐へ金や珍品を献上。太宗はチベットとの婚姻を許し、文成公主を妻とした。太宗は礼部尚書の江夏郡王道宗に婚儀を任せ、公主を送った。その当時王であるグンソグンツェンは部下の兵を率いて柏海にとどまり、河源にて自ら公主を迎え入れた。公主の為に城を築き、公主を住ませた。公主はチベットの赦面を嫌い、国中に命を下し赦面をやめさせた。春、ガルは唐の右衛大將軍となった。太宗はガルの事を気に入り、琅邪公主を妻にしようとした。しかし、ガルは断った。	『資治通鑑』巻195、6157頁。 『舊唐書』吐蕃伝上、 5221～522頁。 『資治通鑑』巻196、6164～616頁。
顯慶3年 658年	吐蕃が唐に公主を願い出たがこれを拒否される。そのため、ガルが軍を率いて吐谷渾を攻撃する。チベットが吐谷渾へ侵攻した。吐谷渾はこの戦いに大敗し、河源王慕容諾曷鉢とその妻弘化公主は涼州へと亡命した。	『舊唐書』吐蕃伝上、5223頁。 『資治通鑑』巻201、6335頁。 『冊府元龜』 ⁷⁶⁾ 巻979、外臣部和親 11498。
永隆元年 680年	永隆元年に文成公主が亡くなった。高宗は使いをやって彼女を弔った。	『舊唐書』吐蕃伝上、5224頁。 『資治通鑑』巻202、6399頁。
長安3年 703年	チベットは使いを遣わし馬や金を献上し、婚姻を求めた。則天武后はこれを許した。	『舊唐書』吐蕃伝上、5226頁。
神龍元年 705年	チデツクツェンの祖母チェマロがチデツクツェンとの婚姻を願った。	『舊唐書』吐蕃伝上、5226頁。
神龍3年 景龍元年 707年	雍王守礼の娘であり、中宗の養女となっている金城公主がチデツクツェンに嫁ぐこととなった。	『資治通鑑』巻208、6610。 『冊府元龜』巻979、外臣部、和親 11498頁。
景龍3年 709年	金城公主を迎えに大臣の尚贊吐等が唐へとやってくる。	『舊唐書』吐蕃伝上、5226-5227頁。
景龍4年 710年	中宗は娘である金城公主を嫁にやることを悲しみ泣き、自ら始平県まで見送った。金城公主はチベットについた後、建てられた城に住んだ。	『舊唐書』吐蕃伝上 5226～5228頁。
先天元年 712年	金城公主が嫁いだ化粧料として河西九曲を獲得する。	『舊唐書』吐蕃伝上、5228頁。
先天2年 713年	金城公主がチデツクツェンの祖母チェマロが亡くなったことを玄宗に知らせた。玄宗は使いを遣わし、彼女を弔わせた。(敦煌年代記によれば前年の712年に亡くなっている)	『冊府元龜』巻979 外臣部和親11499頁。

76) 『冊府元龜』第11冊、鳳凰出版社、2006年12月。

開元17年 719年	ツェンポが頭を下げて唐の臣と称するならば辺境は安定するという臣下の進言に納得しチベットへ使いを遣わしツェンポと金城公主に会った。和平を結ぶことをチベットは喜び、唐へと贈物を贈り、金城公主はまた別に贈物を贈った。	『舊唐書』吐蕃伝上 5228～5231頁。
開元18年 720年	金城公主が毛詩、礼記、左伝、文選の下賜を願った。これに対し臣下は与えるべきでないとし、又公主の意思でこれを願ったわけではないと玄宗に文を送った。	『舊唐書』吐蕃伝上 5231～5233頁。
開元21年 733年	金城公主は玄宗に国境を決めそこに碑を設置することを求めた。	『冊府元龜』卷653、奉使部 7825頁。
開元27年 739年	金城公主が亡くなる。その2年後に彼女が亡くなったことが告げられた。それと同時にチベットは和平を願ったが玄宗はこれを許さなかった。	『舊唐書』吐蕃伝上、5235頁。

(1) 文成公主

チベットのツェンポと公主との婚姻が決まるまでの経緯について書かれた史書はなく、山口氏や『『冊府元龜』吐蕃史料校証』の注釈、『資治通鑑』からその経緯を推察することができる。

貞観8年（634）にソンツェンガムボは初めて唐へ朝貢した。太宗はこれに対し、貞観10年（636）馮德遐を使者としてチベットへと遣わした。この時、ソンツェンは馮德遐から突厥や吐谷渾が公主を娶っていることを聞き、公主を娶るため、唐へ帰る馮德遐にチベットの使者を随行させた。その時公主との婚姻を太宗へ要請した。太宗はこれを初め許そうとしたが、同年末に吐谷渾の使者が唐へ忠誠を誓う形で来朝し、公主との婚姻を願い出た。太宗はこれを許し、チベットとの婚姻を認めなかった。吐谷渾を優先した理由があった。吐谷渾には貞観9年（635）に親チベット派と決別し、親唐派政権を樹立した王がいた。翌年その王は殺されたが、その息子である諾曷鉢が父の志を継いで貞観10年末に唐へと入朝したのである。太宗としては新唐派を優先し、この勢力を強めさせたかったのであろう。時期は定かでないがその後、吐谷渾へと公主が嫁ぐことを許している。このことについては『資治通鑑』巻195、貞観13年条にある。

吐谷渾王諾曷錮來朝、以宗女為弘化公主、妻之。⁷⁷⁾

とある。その後、貞観13年（639）に弘化公主が諾曷鉢へと嫁いだ。

チベットの使者は自国へ帰るとソンツェンへとこの事（後に来朝した吐谷渾を優先し、婚姻を断ったこと）を話した。ソンツェンはこれを聞いて怒ったのだろう。そのため吐谷渾へ攻撃を行った。

貞観12年（638）には松州を攻撃するが唐の反撃に合い退却している⁷⁸⁾。このことについては『新唐書』本紀第二には、

八月壬寅、吐蕃寇松州、侯君集為當彌道行軍大總管、率三總管兵以伐之。

九月辛亥、闊水道行軍總管牛進達及吐蕃戰于松州、敗之。⁷⁹⁾

とある。これがきっかけとなって唐はチベットの婚姻を許可している。それは『資治通鑑』巻195、貞観

77) 『資治通鑑』第7冊、6150頁。

78) 山口瑞鳳『吐蕃王国成立史研究』372～373頁。

79) 『新唐書』第1冊、38頁。

12年に記載がある。

敗吐蕃於松州城下、斬首千餘級。弄讚懼、引兵退、遣使謝罪、因復請婚。上許之。⁸⁰⁾

唐が許可した理由として考えられるのは、この当時唐は軍事力を西突厥や朝鮮半島に重きを置いており、チベットを抑え込むのに兵力を割きたくなかったためであろう。藤野氏は唐が西域の進出をはかっていた⁸¹⁾ ことを理由に挙げている。

一方のソンツェンガムポは唐と婚姻を結ぶことにより唐の文化や学問を取り入れ、チベット史の中で初めて唐の公主を娶ったと誇示したかったのである。

このように双方の思惑がかみ合い貞観14年(640)に文成公主は古代チベット王国へと嫁いだ。嫁いだ相手はソンツェンガムポの息子グンソングンツェンである⁸²⁾。ソンツェンは貞観12年(638)に王位を息子に譲っていた。グンソンは文成公主が嫁いで来た際、黄河上源の河源で迎えている。そして公主のために城を築き住まわせた。

文成公主がチベットへと嫁いだ際のことは絵画にも残こされている。『新唐書』卷五十九藝文三、丙部子録、雜藝術類に、「閻立德畫文成公主降蕃圖」⁸³⁾とあり、閻立德が「文成公主降蕃圖」を描いていることが分かる。

チベットはソンツェンが望んでいた通り中国の文化や学問を受容し、文化面でも発展していく。『旧唐書』卷196吐蕃伝上に、「自亦釋氍裘、襲紈綺、漸慕華風。仍遣酋豪子弟、請入國學以習詩・書。又請中國識文之人典其表疏」⁸⁴⁾とある。また、同様の内容が『資治通鑑』卷196にも、

贊普…(中略)…慕中國衣服、儀衛之美…(中略)…自服紈綺以見公主。(中略)亦漸革其猜暴之性、遣子弟入國學、受詩・書。⁸⁵⁾

とあり、王自ら唐の文化を受容しようとしていた姿勢が伺える。

ソンツェンは文成公主が嫁いだことに対し、『旧唐書』吐蕃伝に、

我父祖未有通婚上國者、今我得尚大唐公主、為幸實多。當為公主築一城、以誇示後代⁸⁶⁾

とあり、ソンツェンにとって公主を娶ることが権威の証であることが伺える。

その後、龍朔3年(663)にチベットが吐谷渾を滅ぼすまで両国の争いは見られない。

文成公主の出自に関する記録はなく、太宗の実の娘でない偽物の公主とされる。山口氏は文成公主が、吐谷渾へ降嫁した弘化公主⁸⁷⁾より優遇されなかったことを理由に挙げている⁸⁸⁾。しかし彼女が偽公主である理由に納得しかねる。後述するように皇帝の実の娘を嫁がせた例は三人しかおらず、彼女等の嫁ぎ先

80) 『資治通鑑』第7冊、6157頁。

81) 藤野月子『王昭君から文成公主へ—中国古代の国際結婚』100頁。

82) 山口瑞鳳『チベット』下巻 改訂版、23~24頁。

83) 『新唐書』第5冊、1559頁。

84) 『舊唐書』第16冊、5222頁。

85) 『資治通鑑』第7冊、6164頁。

86) 『舊唐書』第16冊、5221~5222頁。

87) 『新唐書』第11冊、3519頁には貞観十四年、與武衛將軍慕容寶節送弘化公主於吐谷渾、坐漏言主非帝女とある。

88) 山口瑞鳳『チベット』下巻 改訂版、23~24頁。

は皆ウイグルであり、唐の勢力がかなり弱まってからのことである。文成公主の時代は唐が全盛期であり、文成公主が太宗の実の娘である必要もない。弘化公主が文成公主より優遇されていたのは、吐谷渾が親唐派であったからだと推察される。

文成公主は偽公主として嫁ぎ、その夫も643年に落馬で亡くなった⁸⁹⁾。なお、この間にマンソンマンツェンを産んでいる。その後3年間喪に服すと、義父のソンツェンガムボと再婚した。この喪に服している間に文成公主は唐から仏像を取りよせた⁹⁰⁾。ソンツェンと再婚した3年後の649年に、文成公主は亡くなっている。

『新唐書』巻105列伝第30 李義琰、巢、義琛伝には、

貞観中、文成公主貢金，遇盜於岐州。⁹¹⁾

とあり、貞観の間に文成公主が太宗へ金を献上しようとしていることが分かる。

その後、彼女の息子であるマルソンマンツェンが儀鳳元年（676）に亡くなっている。それに関して『資治通鑑』巻202、調露元年（679）には、

吐蕃文成公主遣其大臣論塞調傍來告喪，并請和親，上遣郎將宋令文詣吐蕃會贊普之葬。⁹²⁾

とあり、文成公主が大臣を遣わしその事を唐へと知らせている。また唐はこれに対し、ソンツェンを弔わせずにチベットまで人を送っている。

開耀元年（680）に文成公主が亡くなり高宗はチベットに使いを送り弔っている。

このことについては『旧唐書』『新唐書』『資治通鑑』にも見られる。

『旧唐書』吐蕃伝には、

永隆元年、文成公主薨、高宗又遣使弔祭之。⁹³⁾

『新唐書』吐蕃伝には、

永隆元年、文成公主薨、遣使者弔祠⁹⁴⁾

『資治通鑑』唐紀 第202巻、永隆元年（680）には次のようにある。

文成公主薨于吐蕃。⁹⁵⁾

文成公主が亡くなるまで両国に和平をもたらす以外に唐の文化を流入させ仏教をもたらした。仏教がチベット全体に広まるのはもっと後の話である。現在もユンブランカ宮ではソンツェンガムボの像と共に文成公主が祭られている⁹⁶⁾。またチベット国内では伝説として知られており、チベットの人々にとっては馴染み深い人物である。

89) 同年からソンツェンが王となっている。中国側の歴史書にはグンソンゲンツェンの記載はなく全て、弄讚、ソンツェンとされている。

90) 山口瑞鳳『チベット』下巻 改訂版、26頁。

91) 『新唐書』第13冊、4034頁。

92) 『資治通鑑』第7冊、6393頁。

93) 『舊唐書』第16冊、5224頁。

94) 『新唐書』第19冊、6078頁。

95) 『資治通鑑』第7冊、6399頁。

96) 石浜裕美子『図説チベット歴史紀行』河出書房新社、1999年9月、28～29頁。

(2) 金城公主

長安3年(703)に、チベットが唐に降嫁公主との婚姻を求め、則天武后もそれを許可している。『旧唐書』吐蕃伝に次のように見られる。

久視元年…(中略)…明年、又遣使獻馬千匹、金二千兩以求婚、則天許之。⁹⁷⁾

この時、唐側が婚姻を許可したのは理由があった。2年後の神龍元年(705)に武后が退位したことから分かるように武後の権力も衰えてきた頃である。さらに聖暦元年(698)には突厥に攻め込まれた。そのため703年の婚姻の許可は、突厥の侵攻と言う大変な状況下にあった唐がチベットとの戦闘を続けるのが困難とみなしたためだと考えられる。唐はこの時からチベットとの婚姻により憂いを取り除きたかったであろう。

一方チベットが婚姻を求めてきたのにも理由がある。この当時チベットの周辺諸国が反乱を起こし、その平定に苦勞していた。そのため唐と争っている余裕がなかったのである。

しかしこの婚姻は、チドゥソンが遠征の最中に亡くなったため成立しなかった。

その後、神龍元年(705)にチドゥソンの母であり、その息子チデツクツェンの祖母であるチェマロが唐へと婚姻を願い出た。神龍2年(706)に、チベットが請う形で神龍会盟が唐とチベットの間に結ばれた⁹⁸⁾。そして神龍3年(707)に金城公主がチデツクツェンと結婚することが決まる。

具体的な婚姻の経緯は『旧唐書』吐蕃伝では記事が前後し、理解しにくい。そこで、中宗本紀を用いて編年順に整理した。

〔神龍三年(707)〕三月丙子、吐蕃贊普遣大臣悉董熱獻方物。

〔同年〕夏四月辛巳、以嗣雍王守禮女為金城公主、出降吐蕃贊普。庚寅、幸薦福寺、曲赦雍州。

〔景龍三年(709)〕八月…(中略)…庚寅…(中略)諸…吐蕃贊普遣使勃祿星奉進國信、贊普祖娑進物。

〔同年〕十一月…(中略)…甲戌…(中略)…吐蕃贊普遣其大臣尚贊吐來逆女。

〔景龍〕四年(710)春正月…(中略)…丁丑、命左驍衛大將軍・河源軍使楊矩為送金城公主入吐蕃使。己卯、幸始平、送金城公主歸吐蕃。⁹⁹⁾

チベットが公主を願い出た事に関しては前述の通り、チデツクツェンの祖母が関与している。その理由にはチデツクツェンが10歳に満たない幼い少年であり、彼女が摂政していたことが挙げられる。彼女はチデツクツェンが王となるために国内外の反乱を治め、唐との争いを避けたかったのであろう。チドゥソンが亡くなった後チデツクツェンが後継者となったが王位を継ぐのは金城公主が嫁いってから2年後である。佐藤氏¹⁰⁰⁾も金城公主の入蔵は祖母チェマロの働きが大きいとしている。

チベットは、このような理由で婚姻を求めたが、唐が婚姻を許したのにも理由がある。神龍元年(705)に中宗が即位した時も突厥は唐へ侵攻している。その翌年に会盟が結ばれ金城公主の婚姻が決められた。

97) 『舊唐書』第16冊、5226頁。

98) 菅沼愛語『7世紀後半から8世紀前半の東部ユーラシアの国際情勢とその推移—唐・吐蕃・突厥の外交関係を中心に—』124~127頁。

99) 『舊唐書』第1冊、144~149頁。

100) 佐藤長『古代チベット史研究』上巻、407~409頁。

そして景龍2年（708）に突厥へ攻撃するが、中宗の毒殺により取り止めになった¹⁰¹⁾。このことから唐はチベットへ向けていた軍を突厥へとまわすために婚姻を許可したのであろう

中宗はチベットへと嫁がせる相手として可愛がっている金城公主を選んだ。そして『旧唐書』吐蕃伝には、中宗が文成公主との婚姻について言及している。

睽彼吐蕃、僻在西服、皇運之始、早申朝貢。太宗文武聖皇帝德侔覆載、情深億兆、思偃兵甲、遂通姻好、數十年間、一方清淨。自文成公主往化其國、因多變革、我之邊隅、亟興師旅、彼之蕃落、頗聞彫弊。頃者贊普及祖母可敦、酋長等、屢披誠款、積有歲時、思託舊親、請崇新好。金城公主、朕之少女、豈不鍾念、但為人父母、志息黎元、若允乃誠祈、更敦和好、則邊土寧晏、兵役服息。遂割深慈、為國大計、築茲外館、聿膺嘉禮、降彼吐蕃贊普、即以今月進發、朕親自送于郊外。

中宗召侍中紀處訥謂曰、昔文成公主出降、則江夏王送之。卿雅識蕃情、有安邊之略、可為朕充吐蕃使也。處訥拜謝、既而以不練邊事固辭。上又令中書侍郎趙彥昭充使。彥昭以既充外使、恐失其權寵、殊不悅、司農卿趙履溫私謂之曰、公國之宰輔、而為一介之使、不亦鄙乎。彥昭曰、然計將安出。履溫因陰託安樂公主密奏留之。於是以左衛大將軍楊矩使焉。其月、帝幸始平縣以送公主、設帳殿於百頃泊側、引王公宰相及吐蕃使入宴。中坐酒闌、命吐蕃使進前、諭以公主孩幼、割慈遠嫁之旨、上悲泣歎歎久之。因命從臣賦詩餞別、曲赦始平縣大辟罪已下、百姓給復一年、改始平縣為金城縣、又改其地為鳳池鄉愴別里。公主既至吐蕃、別築一城以居之。¹⁰²⁾

チベットは唐初に朝貢を申し出てきており、太宗は兵を休ませることを思い、遂に通婚を望んだ。文成公主がチベットへと嫁ぎそこから数十年間、全ての地方は何事もなかった。文成公主が亡くなってから唐側の辺境は、たびたび兵団が興り、チベットの軍は疲労していた。このころツェンポとその祖母のチェマロ・酋長等の者は、何度も誠実な様子を見せ、長年それが続いた。そして新たに和親を願った。金城公主を嫁がせ、更に和平を求めるのならば、すなわち周辺の土地は落ち着き、兵役は少なくなるだろうと、中宗は述べている。

金城公主の婚姻は突厥を鎮めるために兵をチベットにまでまわしたくない唐と国内と国外が荒れて忙しく唐と戦う暇がないチベットの思惑がかみ合ったのであった。

金城公主は前年にやってきたチベットの大臣と共にチベットへと向かった。この際、中宗自ら始平県まで見送りに来て宴を開いている。そしてこの時“送金城公主適西蕃詩”として読まれた詩が『全唐詩』に見られる。藤野氏はその詩には公主が嫁ぐ必要性について君主と臣下に一致した共通認識が存在していると指摘している¹⁰³⁾。

金城公主は嫁いってから三年後の先天2年（713）に、その時の皇帝玄宗にチベットツェンの祖母チェマロが亡くなったことを伝えた。チェマロが亡くなったのは前年の先天元年（712）である。玄宗は、それに対し使者を送り彼女の死を弔った。

金城公主とチベット王との婚姻により、和平が訪れるという期待も空しく、翌年開元2年（714）にチ

101) 菅沼愛語『7世紀後半から8世紀前半の東部ユーラシアの国際情勢とその推移—唐・吐蕃・突厥の外交関係を中心に—』68～70頁。

102) 『舊唐書』第16冊、5227～5228頁。

103) 藤野月子『王昭君から文成公主へ—中国古代の国際結婚』110頁。

ベット軍は大軍を率いて臨洮へ攻め入った。唐はこれを撃退し、その後チベットへ派遣した左驍衛郎將の尉遲環が彼女を慰めている¹⁰⁴⁾。

その翌々年の開元4年(716)から金城公主は双方の和平のために尽力するのである。その年チベットは和平を願い出て、唐からはチデツクツェンと金城公主へと贈り物がされた。金城公主はこれに対し感謝の意を述べている¹⁰⁵⁾。

翌年の開元5年(717)再び和平を願い、金城公主は玄宗へ上表している。上表文で彼女はチベット側の意向を伝え、会盟を行い、玄宗がその文に署名することを願っている。結局玄宗は会盟が既に結ばれており、再び結び直す必要はないとしたため、結ばれることはなかった。開元6年(718)以降、チベットは唐へと侵入することを止め、数年の和平が訪れた。これには玄宗の従妹である金城公主の願いが大きいのであろう¹⁰⁶⁾。

しかし、和平は続かず、開元10年(722)にチベットは小勃律を攻撃したことにより戦いは再開した。¹⁰⁷⁾これに対し、金城公主は開元17年(729)に使者に書状をもたせた。翌年の開元18年(730)玄宗は臣下の助言によりチベットと会盟を結ぶことを決め、金城公主へと使いを送り、そこからチデツクツェンに直接和平を結ぶようにした。その時、玄宗は金城公主に対し親書を渡している¹⁰⁸⁾。

開元19年(731)に、唐が送った使者に金城公主が願い出たか否かは定かではないが、使者は金城公主に『毛詩』、『礼記』、『左伝』、『文選』を各々一部贈るように願い出ている。玄宗は臣下の反対を押し切り、彼女に願い出のものを贈った¹⁰⁹⁾。

開元21年(733)金城公主は玄宗に上表し、そこで赤嶺に碑を建てることを願い出た。これは叶えられ同年に赤嶺に碑が建てられた¹¹⁰⁾。

しかし、開元26年(738)には戦いは再開し、赤嶺の碑は唐によって壊されている。そして開元27年(739)に金城公主は亡くなるのである¹¹¹⁾。

金城公主は、高宗と則天武後の息子である李賢(章懐太子)の息子雍王守禮の60人余りいる子供のうちの一人である。中宗にとっては姪であり、その後、中宗が養子として中宗の娘となった。中宗自らが見送りに出るほど可愛がっていた。彼女が降嫁した際は、兵役の免除や罪人の酌量など行うなど金城公

104)『資治通鑑』第7冊、6706頁。

105)佐藤長『古代チベット史研究』上巻、437頁。

『冊府元龜』第11冊、11331頁。

106)佐藤長『古代チベット史研究』上巻、437～440頁。

107)菅沼愛語『7世紀後半から8世紀前半の東部ユーラシアの国際情勢とその推移—唐・吐蕃・突厥の外交関係を中心に—』108頁。

108)佐藤長『古代チベット史研究』上巻、461～463頁。

『舊唐書』第16冊、5230～5231頁。

109)『舊唐書』第16冊、5231～5232頁。

佐藤長『古代チベット史研究』上巻、463頁。

110)『冊府元龜』第11冊、11334頁。

111)菅沼愛語『7世紀後半から8世紀前半の東部ユーラシアの国際情勢とその推移—唐・吐蕃・突厥の外交関係を中心に—』144～145頁。

主への想い入れが強いことが伺える。

金城公主については、詩の内容を解釈する際に見られる。『杜詩詳注』においては7箇所はその名が登場している。その中の「近聞」においては“舅甥和好應難棄”¹¹²⁾で文成公主、金城公主の婚姻について触れられている。

また彼女は739年に没するまで両国の和平樹立につとめ、一時的に成功した。そのための努力は惜しまず玄宗に和平を請うなど手を尽くしたといえるだろう。さらに佐藤氏によれば彼女が生きている間に起こった戦いでは彼女の化粧料としてチベットへ渡された河西九曲が本拠地となった。両国の抗争との板挟み状態になり、チベット内でも困難な立場に追い込まれ、精神的にも疲れていた。そのため、カシミールへ逃れよう算段したほどである¹¹³⁾。その一方で、730-736年ころは仏教、道教、儒教その他の学問がチベット伝えられ、仏教の本格的導入を準備したなどチベットの文化育成にも貢献している¹¹⁴⁾。

(3) 唐代にチベット以外へ嫁いだ公主について。

唐代は中国の歴代王朝の中で公主の降嫁が最も盛んに行われている。前述の文成公主や金城公主を始めとして吐谷渾へ嫁いだ弘化公主など、玄宗の時代以降は増えている。藤野氏によれば16人にもなる。その中で養子にとることもなく、実の娘である公主は3人である¹¹⁵⁾。その公主等は全てウイグルへと嫁いでおり、実の娘である公主を嫁がせることに至った唐の力の弱さというのはここにも現れている。唐の時代に嫁いだ公主の中で特異性をもつならば、実の娘を定期的に嫁がせたウイグルである。

『旧唐書』、『新唐書』に、それぞれ唐から他国へと嫁いだ公主の名前が見られた回数について調べてみた。まず真公主の場合を年代順に挙げてみる。乾元元年（758）に嫁いだ肅宗の娘寧国公主、『旧唐書』巻14、『新唐書』巻6、貞元四年（788）に嫁いだ徳宗の娘咸安公主、『旧唐書』巻12、『新唐書』巻7、長慶元年（821）に嫁いだ憲宗の娘太和公主、『旧唐書』巻29、『新唐書』巻7である。偽公主は、金城公主は『旧唐書』巻17、『新唐書』巻11、文成公主は『旧唐書』巻8、『新唐書』巻4、弘化公主は『旧唐書』巻5、『新唐書』巻3、他の公主はそれぞれ5回にも満たない。

その名の記述が多く、かつ中宗が可愛がっていたことから金城公主が特異性をもっていると言える。この回数は、唐が嫁ぎ先の国との力関係が同等に近いものほど多い。それは同時に“公主”がいかに外交手段として大事にされてきたが見えてくるであろう。

四 おわりに

7世紀から8世紀前半における唐を巡る国際関係は北西に突厥、北東に高句麗、西にチベットと多くの国と関係が交錯していた。この状況で唐とチベットとの関係はソンツェン王が貞観8年（634）に唐へ

112)『杜詩詳注』第3冊、中華書局、1979年10月、1283～1284頁。

113)佐藤長『古代チベット史研究』上巻、482～483頁。

114)『世界大百科事典』第2版、平凡社、1998年10月の山口氏による解説を参照。

115)藤野月子「唐代和蕃公主考：降嫁に付随して移動したヒトとモノ」『九州大学東洋史論集』第41巻、2013年3月、79～82頁。

朝貢して来たこと両国の関係が始まる。その後チベットは他国と同様に王族の妻とするために公主を求めてきた。貞観14年（640）に偽公主とされる文成公主がチベットへと嫁ぎ、景龍4年（710）に金城公主がチベットへと嫁ぎ、この2人の公主が亡くなるまでの7世紀から8世紀前半の間両国関係は比較的安定していた。先行研究において、唐チベット関係は政治的、軍事的側面から議論され、文成公主、金城公主の両の公主について議論されることは少なかった。そこで本論文は、これ迄取り扱われることがほとんど無かった公主から見た唐とチベットとの関係について述べた。

チベットが統一された当初は圧倒的に唐の力が強く、文成公主が亡くなる前の670年頃からチベットは軍事力を拡大し始め、唐軍を大敗させるまで強大となり、西域を巡り何度も交戦することとなった。709年に金城公主がチベットへと嫁いだ後も数年の和平の後、再び交戦が開始され、金城公主が亡くなった後に起きた安史の乱ではチベット軍が長安へと侵攻するに至ったのである。

文成公主が嫁いでから約70年後に金城公主が嫁いでいるが、その間の両国関係の変化により、両公主の婚姻に求められた役割は異なってくる。そしてそれは、両国の思惑の違いもあり、それぞれの国が求める役割があった文成公主は唐から和平と唐の権威の強さの象徴を求められ、チベットからは文化の流入、王の権威の強さの象徴と和平を求められた。金城公主は和平と唐の権威の強さの象徴を求められ、チベットから和平とチベツクツェンが王と認められることを求めた。

結果として文成公主の降嫁は両国に和平を与え、チベットが望んだとおり唐の文化をもたらした。一方の金城公主の場合は数年の和平しか見られなかった。しかし彼女は和平のためにたびたび玄宗に和議を請うなど尽力し、文化交流においても貢献している。

両公主のチベットへの降嫁による影響は、現代のチベットにもみられる。特筆すべきは仏教のチベットへの流入である。その契機を創始したのが文成公主である。さらにチベットのみならず中国でも文成公主の事績が知られている¹¹⁶⁾。

このため、両公主に対する評価が分かれる。文成公主は現代においても評価され、金城公主はその当時において評価された。しかしこれは主として唐とチベットとの両国関係についての視点からであり、公主自身の視点からの論点ではない。

公主自身の視点から唐とチベットとの両国関係について見るならば、両公主とも両国の良好な関係を改善するために尽力したことが分かる。両公主は婚姻という女性が政治に関与する形態ではあったが、その足跡は当時から現在にいたるまでチベットと中国との関係並びにチベットへの仏教という欠かせない影響を与えたのであった。とりわけ従来の唐とチベット関係の政治外交を主軸におき、両公主の功績が看過されてきた成果に対し、本論文では公主を主軸に、両公主の影響がいかに大きかったかを明らかにした。

文成公主、金城公主ともに自己の意思に関係なくチベットへ嫁いたが、その中で最善を尽くし、後世に影響を及ぼし、足跡を残した公主であったと評することができるであろう。

116) 溝口貞彦：「ソンチェン・ガンボと文成公主」『二松学舎大学人文論叢』第80巻、2008年3月、15～16頁。